

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 Muhammad Rum

論 文 題 目

The Politics of Disaster in ASEAN: Development of  
International Cooperation in ASEAN in Disaster  
Management

(ASEANにおける災害の政治学:災害対策に関するASEAN  
における国際協力の展開)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学	教授	島田 弦
委員	名古屋大学	教授	山形英郎
委員	名古屋大学	教授	西川由紀子

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 論文の概要と構成

本論文は、(1) なぜ ASEAN は地域災害対策・緊急対応メカニズムを形成できたのか、(2) どのように、国内の指導者から地域レベルの ASEAN 官僚にわたって、国内および国家間レベルでの競合するアクターが ASEAN の災害対策協力で交渉し、地域主義に貢献したのか、(3) ASEAN 域内での災害対策協力はどのように「保護する責任 Responsibility to Protect, R2P」と関係しているのか、について論じるものである。また、そのために、本論文では、社会構成主義 Constructivism に基づき、ある特定の課題への一致した対応について、それが生成し、広範な合意を獲得し、規範化していく過程を分析するノーム（規範）サイクル理論、国内レベルと国際レベルの政治分析から合意形成の過程を考察するツーレベルゲーム理論という政治学モデル、そして、国家主権の限界に関わる「保護する責任」という規範的概念を用いて上述の問題について考察しようとしている。

本論文は、全 5 章で構成されている。第 1 章は、背景説明と先行文献レビューのあと、理論的枠組みとしてノーム（規範）サイクル理論とツーレベルゲーム理論についてその妥当性を検討している。

第 2 章は、ASEAN における災害対策・緊急対応協力の制度化について、ASEAN 関係部署でのインタビューを通じて明らかにしている。原則として議事録を残さない ASEAN においては、このような作業はインタビューが重要であり、本論文は ASEAN 協力強化の一部分であってもそのプロセスを詳細に明らかにした点では重要である。

第 3 章は、ASEAN における地域災害対策・緊急対応の規範が形成されたかについて、社会構成主義およびノームサイクル理論に基づき論じている。

第 4 章は、ツーレベルゲーム理論に基づく分析である。外交・国際政治においては、国際レベルでの交渉と国内レベルでの政治環境が密接な関係にあり、例えばインドネシアの場合には、民主化に伴いこの二つのレベルでの均衡解を満たすような交渉の範囲が規定されることになる。本論文は、災害対策協力においてインドネシア政府及びその ASEAN 代表が、ASEAN レベルと国内レベルでどのような政策をとったのか、それがツーレベルゲーム理論においてどのような均衡にあったのかを、時間軸による変化も含めて論じている。

第 5 章は「保護する責任 (R2P)」と ASEAN における地域協力を論じている。保護する責任は、ASEAN の不干渉原則と衝突する。国際的な評価と体制維持のあいだで揺れ動いている状況であるため、R2P は ASEAN では転換点に到達していないとする。

第 6 章は、結論であり、論文全体を要約するとともに、研究課題への回答を試みている。

論文は次のように結論している：

(1) ASEAN は、より強い地域機構への変化を進めており、域内協力の深化により地域内でのメカニズムを発展させている。アチェ和平での仲介とミャンマーへの救援活動実施を通じて、加盟国は地域機構が正当化しうるとの認識に達した。ASEAN が初期段階で反応しなければ、これらのケースでは和平の達成や災害救援の受入は失敗していたとする。

## 論文審査の結果の要旨

(2) 域内の災害対策に関する規範は内在化の段階に入っている。ノームサイクル理論の枠組みを適用し、災害対策規範化は、国際的には転換点 tipping point に到達し、ASEAN では内在化 internalization 段階に入っている。ただし、R2P の受諾はまだ限定的であり、懐疑的な見解から楽観的な見解まで幅がある。

(3) 上記2点の背景として、ASEAN における強いリーダーシップの存在と、国内レベル及び域内レベルでの国際的な支援があること。ASEAN 事務局の事務局長や災害対策人道支援局長などが「柔軟な関与」と言った不干渉原則を緩和する概念を提唱し、ミャンマーへの ASEAN による救援実施を推進した。また、インドネシア、シンガポールなどの政治指導者が、地域の災害対策協力に取り組むことを説得した。国際的には、1990年代以降、国際機関や各国政府が ASEAN 及び個別加盟国への災害対策のための資金援助を継続してきた。

(4) 東南アジア諸国での政治環境の変化が域内協力への交渉をより容易にした。ツーレベルゲーム理論に基づき、本論文はいくつかの ASEAN 主要国での民主化と政治的自由化が、ASEAN レベルでの ASEAN ウェイの再定義に関する率直な議論を可能とし、また国内レベルでも、インドネシアやフィリピンでの率直な議論が行われるようになった。ASEAN 憲章の採択や AADMER の批准に関する議論に現れている。その結果、ASEAN は指導者個人に依存した国家クラブからより近代的な地域機構へと変化している。

### 2. 論文の評価

2008年に ASEAN 憲章が発効して以来、ASEAN はより深い地域内協力へと進んでいる。1975年の発足当初は冷戦体制下での東南アジアにおける社会主義に対抗するための国家グループという性格の強かった ASEAN は、政治協力を超えて統合の範囲を広げている。特に、「非伝統的安全保障」分野での協力は重要であり、ASEAN 諸国は地域災害対策協力を開始し、2005年に署名された「災害対策緊急対応協定 Agreement on Disaster Management and Emergency Response (AADMER)」が2009年に発効し、そのもとで ASEAN 諸国はさまざまな活動の制度化を進めている。

一方で、このような協力は、まず、比較的利害の対立の少ないところから開始するという点で、「不干渉・主権尊重・協議と合意」を基本とするいわゆる「ASEAN 方式 (ASEAN Way)」に則っている。他方で、災害分野などの協力は、さらに政治的に重要である民主化などへの足がかりとなっている点も重要である。この背景には、2004年に起きた北スマトラ大地震によるアチェ州での津波被害への ASEAN 支援が、その後のアチェ州での反政府分離勢力とインドネシア政府との和解に ASEAN が役割を果たすことになった経験がある。そして、AADMER に基づくもっとも重要な活動は、サイクロン (ナル吉斯) の被害を受けたミャンマーへの人道支援である。ミャンマーは当初、国内人権への介入を恐れて人道支援を受け入れていなかったが、ASEAN が支援受入を説得し、さらにそれは、軍政の緩和と民主化改革へとつながった。

## 論文審査の結果の要旨

ASEAN 憲章は、ASEAN が法人格を持つ地域機構であると定義し、その各加盟国及び加盟諸国間の関係は、EU などと同様に法的な権利義務関係によって規定されることになった。しかし、ASEAN の決定がこれまでの主権尊重・不干渉の原則を変えて各加盟国を拘束するのか否か、またはそれをどの程度実行するのかについては議論の分かれる点である。本論文は、加盟国間で比較的利害の相違が少ない性格の側面と、介入という政治的に微妙な問題の側面という、対照的な課題を包含する災害対策（救援・復興・防災）という視点から、ASEAN 統合および域内関係の規範化の程度と方向性について政治学的な考察を試みた研究である。

ASEAN はその意思決定過程において、多数決ではなくコンセンサスをベースとし、議事録などをほとんど公開しないため、一次資料による研究には困難が付きまとう。本博士論文では、災害対策に関わる諸部門担当者や、ASEAN 統合において重要な役割を果たした人物（事務局長など）へのインタビューで、一次資料の不足を補っている。

さらに、本論文は、異なった三つの分析枠組みから、災害対策分野における ASEAN 域内協力の過程を論じることにより、限られた情報から奥行きのある考察を行っている。それぞれの分析枠組みの適用にあたり、先行研究で提示された理論を詳細に引用し、かつ豊富な研究事例と比較した上で、ASEAN における災害対策協力の考察を行っている点は、国際政治学の論文として十分な論理的水準にあると言える。

ASEAN 共同体を実証的に考察する研究は、資料収集の困難さや ASEAN 特有の意思決定などからまだ十分になされているとは言えない。本論文は、そのような中で災害対策協力というテーマに着目し、ASEAN 統合の過程、現状を論じた研究として重要な価値を持つ。

論文審査は、2019 年 12 月 24 日に開催され、上記 3 名の委員は、①論文題目・章別構成・体裁ともに妥当であること、②論旨は首尾一貫しており、論文として完成されていること、③分析手法は、博士後期課程のあるべき水準を満たしていること、④論文は既存の成果を踏まえて執筆されていること、⑤論文はオリジナルな成果を含んでいることを確認・評価した。

ただし、次の点については今後の検討が必要であると指摘された：

－「規範 norm」や「介入 intervention」といった概念をより明確に定義すべきである。とりわけ、法学（国際法学）や政治学では異なった内容で使用されているため、それぞれの概念の範囲を明確にする必要がある。また、協力メカニズムの存在や整備が、規範と言えるのか。規範の意味についての説明が十分とは言えない。

－三つの分析枠組みを用いているが、それぞれの枠組みの相互関係が十分に論じられていない。

－災害対策における協力メカニズムと実践の強化が論証されるにしても、それが ASEAN 統合の強化につながるプロセスを論証する必要がある。

## 論文審査の結果の要旨

-災害の政治学の経済的側面、さらに ASEAN に対する中国の関与拡大や、インドの経済的伸長が地域政治の再構成に与える意義についても今後論じていく必要がある。

しかし、これらの問題点は本論文の価値や独自性を損ねるものではなく、また Muhammad Rum 君が独立した研究者として研究に取り組んでいく上で望まれる発展的研究課題である。上述のように、本論文は、博士論文としての水準に足りる高い学術的価値とオリジナリティを有していると判断する。

なお、本博士論文の研究成果の一部は、査読付き雑誌論文 2 本として公開されている。また、Rum 君は ASEAN 統合の政治学に関する単行本の編著者にもなっている。

### 3. 判定

以上のような審査の結果に基づき、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものと判定する。